

Ernest Hemingway

●編集委員
上西哲雄
大森昭生
岡本正明
小笠原亜衣
倉林秀男
高野泰志
千葉義也
塚田幸光
辻裕美
中垣恒太郎
中村亨
長谷川裕一
フェアバンクス香織
前田一平
熊谷順子
辻秀雄
田村恵理
田畑佳菜子

魂をゆさぶる文学
伝説的なライフスタイル
ヘミングウェイのすべてを
網羅した本邦初の大事典
ついに刊行!

ヘミングウェイ 大事典

今村楯夫・島村法夫 監修

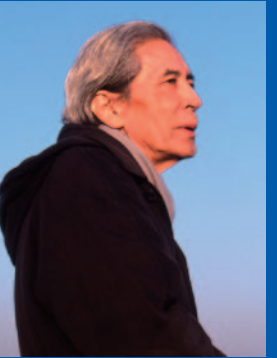
●体裁：B5判上製・カバー装・函入●頁数：約1000頁●価格：本体25,000円+税●刊行時期：2012年5月予定

勉誠出版

巨人の驚くべきスケール

私を先導した作家 ——アーネスト・ヘミングウェイ

小川国夫 (作家)



志賀直哉は国木田独歩を読んで、短篇小说の書き方を学んだと述懐しているが、私の場合はどんな具合になっていたのかと振り返ってみると、ヘミングウェイに教えられるところが多かった。先ず読んだのが『われらの時代に』で、たちまち感心してしまった。

第一に自然描写がいいと思った。木々のざわめき、ストーブで燃える薪、谷川で躍ねる魚、何もかも眼に見え耳に聞こえるように書かれていた。大した腕前ではあるが、それも余分には披露しないで、登場人物の心に触れてくる範囲だけしか書かないから、微妙でしかも引き緊った小世界が現れてくるのだと思った。第二に驚いたことは、文章のテンポであつた。かなりのスピードで次から次へと話をくり広げているが、決して大きなことを書き落としていない。しかも、大きなことでもさりげなく触れているだけだ。だから、テンポに釣られて、ころよく読み終えてから、不思議な余韻が残る、どういうわけかと考え直してみると、事の重さが解ってくるがあつた。第三の特徴は、狂気とか破壊とか絶望が微妙なタッチで暗示してあることだつた。それらは戦争とか暴力が人間性に印した痕跡であり、時には異常なセックスの結果であつたりしたので、私は、こうしたマイナスの領域の底知れない暗さを、身につまされて想像した。同時に、闇の力によって傷つく人々は、本来やさしくナイーブで、いわば自然の寵児たちであるように見え、彼らに同情したのであつた。だから、ヘミングウェイをハード・ボイルドの小説家としてとらえ、冷然と暴力を描いているなどと評することには反対であつた。

私は今でも、信州の山小屋へ一人こもつてヘミングウェイを読みかえすことがある。夏の山小屋で、ヴェランダへ出てヘミングウェイを読むのは、かけがえのない時間だ。(『小川国夫全集』第10巻より転載)

椎名誠 (作家)



人は自由にモノゴトを考えることができる。でもそれをいかに柔軟に咀嚼し、的確な言葉にして人に伝えることができるか。

巨人といわれる作家はそれができた。しかも驚くほどスケールの大きなフィールドを自在に動いて。

ヘミングウェイはその巨大な知識欲と探求心を基盤にして、沢山の魅力あふれる人間たちを、小説という舞台で行動させ、思考させ、読む者の魂をゆさぶるような物語を沢山書いた。多くの人がヘミングウェイに憧れるのは、作者ヘミングウェイの行動様式と、その小説の世界が常に一体化していて、小説と作者ヘミングウェイを同時に堪能することができたからだろう。

ぼくは宮沢賢治も巨大な作家として尊敬しているが、賢治が東北の夜に宇宙を眺めて思考した世界を、ヘミングウェイは自身を海流や気流に乗せて地球や宇宙を彷徨わせ、物語を綴っていたのではないかと思っている。

●推薦のことは

●ヘミングウェイについて

味わい深い情報があふれ出す

移動し続けた作家

川本三郎 (評論家)

『老人と海』を訳した福田恆存はその解説のなかで、「時間」のヨーロッパに対し、「空間」のアメリカという対比を試みている。歴史的時間の蓄積のあるヨーロッパに対し、歴史の浅いアメリカでは空間の広がりのほうが圧倒的にリアリティを持つ。

ヘミングウェイの移動性は、「空間」の国ならではの生きるスタイルともいえる。アメリカの国内を旅するように、彼は、世界各地を時間的にではなく、空間的に旅し続ける。

ヨーロッパにおいてもアフリカにおいても、ヘミングウェイは空間を水平的に移動する。過去のしがらみとは無縁に、パリとキューバ、スペインとキー・ウエストを平面的に移動する。ヘミングウェイのハードボイルド的と呼ばれる文体の疾走感、平面性は、この移動のありようと関わり合っている。ハードボイルドの文体は、旅する人間の一種、傍観者の立場から生まれている。

(『ユリイカ』一九九九年八月号より部分抜粋)

平石貴樹 (東京大学教授)



ヘミングウェイ・ファンの渴きをいやす1冊がとうとう出る。いやファンならずとも、アメリカ文学に興味をもつ者なら誰にでも、必携の参考書だろう。しかも読んでいて面白い。なぜなら、普通の参考書に書いてない、味わい深いヘミングウェイ情報がここには溢れているからだ。ヘミングウェイがウィリアム・サロイアンを意外に嫌いだったり、ダシル・ハメットとハードボイルド同士の交流があつたり、ガートルード・スタインとの仲違いの真相(?)を漏らしていたり。そのほか、短編やエッセイは言うまでもなく、未定稿作品や意外に多くの詩、さらに新聞記者時代の記事の数々まで、ここでは丹精こめて解説され、作家と時代がそこから芳醇に浮かび上がってくる。もちろんアフリカやキューバ、釣りや闘牛や愛人たちの話も忘れてはいない。パーボンを片手にちびりちびりとページをめくりたくなる、そんな本だ。編集諸氏の多大なご苦労に乾杯である。



●本書の特色

●全作品を解説し、雑誌記事、手紙についても詳述

「第I部 作品編」では長編、短編はもとより、戯曲、詩などヘミングウェイの全作品を網羅するほか、雑誌記事の全貌を明らかにし、手紙についても 詳細に触れる。

●多彩な関連項目

「第II部 一般項目編」では家族、交友関係から、動植物、地名、衣食住、文芸用語まで、200以上の関連項目を詳述。

●資料・図版も充実

巻頭口絵には、ヘミングウェイの生涯を辿るアルバムを付す。また、本文中に多数の写真を掲載するほか、巻末に年譜、系図、関連地図を付す。

●詳細な索引

利便性を追求し、「人名」「地名」「作品名」「用語(諸概念)」に分けた索引を付す。

●信頼の執筆陣

ヘミングウェイ研究の国内における拠点である、日本ヘミングウェイ協会の総力を結集。最新の成果もとりいれ、ヘミングウェイをめぐる研究の最前線を提供する。

●内容構成

第Ⅰ部 作品編

長編

- 『春の奔流』
- 『日はまた昇る』
- 『武器よさらば』
- 『持つと持たぬと』
- 『誰がために鐘は鳴る』
- 『河を渡って木立の中へ』
- 『老人と海』
- 『海流の中の島々』
- 『エデンの園』
- 『夜明けの真実』
- 『キリマンジャロの麓で』

戯曲

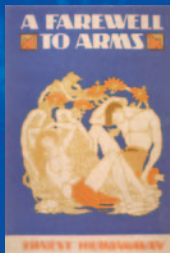
『第五列』

短編

- 『三つの短編と十の詩』
- 『ワレラノ時代ニ』
- 『われらの時代に』
- 『女のいない男たち』
- 『勝者には何もやるな』
- 『第五列と最初の四九の短編』
- 『二つのクリスマス物語』
- 『第五列と四つのスペイン内戦の物語』
- 『ニック・アダムズ物語』
- 『フィンカ・ビビア版ヘミングウェイ全短編集』

その他

- 「神のしぐさ」
- 「バリ」九三年」
- 「マントウの裁き」
- 「色の問題」
- 「セビ・シンガン」
- 「アッシュビール腿」
- 「十字路——小品集」
- 「流れ」
- 「傭兵」
- 「恋する観念主義者の肖像」
- 「愛の欠如」
- 「フリップ・ヘインズは作家だった」



ノンフィクション

- 『午後の死』
- 『アフリカの緑の丘』
- 『移動祝祭日』
- 『危険な夏』
- アフリカもの遺稿



そのほか、
90篇の詩、
350以上の雑誌記事、
580通もの書簡について詳述。

『日はまた昇る』『武器よさらば』

『誰がために鐘は鳴る』『老人と海』 ……。

数々の名作で知られる文豪の全主要作品を解説。

また、スペイン内戦、キューバ、キーウエスト、

釣り、酒、ハードボイルド、氷山理論、闘牛など、

その人生を彩った無数のキーワードを網羅。

第Ⅱ部 一般項目編

家族

- クラレンス父
- グレース・ホール(母)
- ハドリー・リチャードソン
- (最初の妻)
- ジョン(長男)
- ポーリン・ファイファー
- (二番目の妻)
- パトリック(次男)
- グレゴリー(三男)
- マーサ・ゲルホーン
- (三番目の妻)
- メアリー・ウエルシュ
- (四番目の妻)
- マーセリン(姉)
- アーシユラ(番目の妹)
- マデリーン(二番目の妹)
- キャロル(三番目の妹)
- レスター(弟)

作家

- スタイン
- フィッツジェラルド
- フォークナー
- アングソン
- トウェイン
- スタインベック
- ドス・パソス
- リリアン・ヘルマン
- ダシール・ハメット
- サリンジャー
- T・S・エリオット
- エズラ・パウンド
- ソール・ペロー
- カーヴァー
- キャザー
- トマス・ウルフ
- ヴァージニア・ウルフ
- シェイクスピア
- ヘンリー・ジェイムズ
- トルストイ
- ツルゲーネフ
- スタンダール
- バルザック
- ジェイムズ・ジョイス
- ドロシー・パーカー
- テネシー・ウィリアムズ
- ウィンダム・ルイス
- フォード・マドックス・フォード
- グレアム・グリーン
- 開高健
- 大江健三郎
- 小川国夫
- 辻邦生
- 三島由紀夫
- ハーマン・メルヴィル
- ステイーヴン・クレイン
- ジュナ・バーンズ
- D・H・ロレンス
- イサク・ディーネセン



編集者・学者

- マックスウエル・パーキンズ
- チャールズ・スクリブナー
- カーロス・ベイカー
- マルカム・カウリー
- アーノルド・ギンクリッチ
- フィリップ・ヤング
- エドマンド・ウイルソン
- チャールズ・フエンツ
- リリアン・ロス
- イワン・カシュキーン
- ジョン・アトキンス

衣食住



- 装い
- 料理
- 飲み物
- カフェ
- バー
- 酒
- アパート
- ホテル
- 刺刀
- 釣り
- 病氣

文体・技法

- ハードボイルド・スタイル
- 氷山理論／原理
- 内的独白
- 意識の流れ

地名・都市

- フランス
- スペイン
- イタリア
- スイス、オーストリア、ドイツ
- アフリカ
- 中米(カリブ海・キューバ・キーウエスト)
- 北米
- 中国、東南アジア
- パリ
- ヴェニス
- ミラノ
- ミシガン湖
- オークバーク
- キーウエスト

ジェンダー・セクシュアリティ

- 男性性
- 女性性
- 生殖(妊娠・出産・中絶)
- 不能
- 近親相姦
- 異性装
- ホモセクシュアリティ
- レズビアニズム
- 両性具有
- クイア
- セクシファリテイ

交友関係・愛人たち

- アルヴァ・ベッシー
- モーリー・キャラハン
- A・E・ホッチナー
- C・T・ラナム
- アーチボルド・マクリーシュ
- アグネス・フォン・クロウスキー
- マージョリー・バンブ
- ジェーン・メイソン
- アドリアーナ・イヴァンチック
- マレーネ・ディートリッヒ
- キキ
- チャールズ・トンブスン
- フィリップ・バーシヴァル
- シルヴィア・ビーチ
- アリス・B・トクラス
- ケイティ・スミス
- キャバ
- ブルーデンス・ボールトン
- ドーマン・スミス(チンク)
- ジェラルド&サラ・マーフィ夫妻
- 久米民十郎

動植物

- ハイエナ
- ヒョウ
- ライオン
- 水牛
- クズー
- 象
- 牛(闘牛)
- 猫
- ウサギ
- リス
- 馬・驃馬
- アオサギ
- ワシ
- 鮫
- マーリン(マカジキ)
- 鯨
- 蟻
- 蝶
- バッタ・イナゴ
- ツガ
- 松
- ニオイシダ
- ケシ
- リンゴ
- ベリー

モチーフ・批評用語

- 死生観
- 原始主義
- トラウマ
- イニシエーション
- ネイチャーライティング
- ポストコロニアリズム
- モダニズム
- 祝祭
- 双子化体験
- 鏡
- 髪
- 日焼け
- フェティシズム
- 作者あるいは作者性
- 帝国主義
- 伝記研究
- フェミニズム・ジェンダー批評

人種

- インディアン
- アフリカ系アメリカ人
- アフリカ原住民
- ユダヤ人
- 異人種混交
- イタリア人
- ジプシー

生まれながらの 詩人で作家だった ヘミングウェイ

今村楯夫

いつ、作家になろうと決めたかと聞かれ、「覚えていない。いつだって作家になろうと思っていたのだ」と、あるインタビューでヘミングウェイは応えている。おそらく、それは真実だろう。

「ぼく、バッファロー・ビルなんか知らないよ」というのが生まれて始めての文だったと母親は記している。アーネストが一歳と八ヵ月のときだ。それまでの断片的な言葉にもすでに詩人のような閃きがあるが、この一文を生み出す脳裏に潜む想像力と創造力は計り知れないものがある。生まれながらにして詩人であり作家だったのだろう。

ヘミングウェイがモダニズム詩人だったことはあまり知られていない。十二歳のときに書いた野球観戦について謳った詩に始まり、五十六歳のときに妻に送った愛の詩まで、全部で九十編ある。寡作ではあるが、時代を直裁にとらえ、戦争や死や愛と真摯に向き合い、可能な限り言葉を削ぎ落とし、抽象を排し、ものの本質に迫ろうとした姿勢はそのままヘミングウェイの短編と長編小説に通じる。

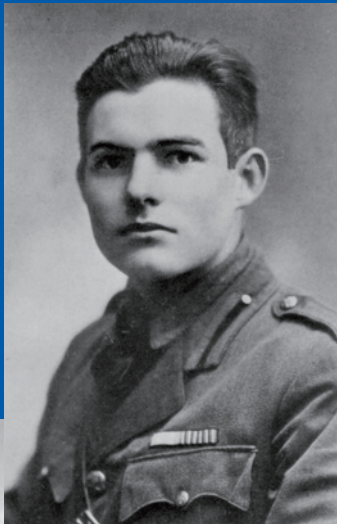
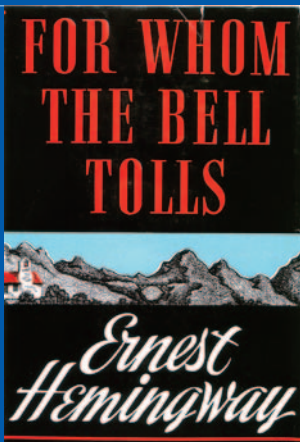
死に至るまで書くことにこだわり続けたヘミングウェイは、文学という言葉芸術に対して終生、実験的であり続け、斬新さを求め続けた作家であったが、その緊迫感から逃れるかのように膨大な手紙を書いている。手紙は心の内を語り、創作の背後に潜む秘密を語る。

この大事典はこれらを網羅的に収録し、文学者であり同時にひとりの人間であったヘミングウェイの実像を浮き彫りにしている。

今村楯夫

(いまむら・たてお)

1943年生まれ。アメリカ文学者、東京女子大学教授。 ニューヨーク州立大学大学院(ビンガムトン校)博士課程修了。日本ヘミングウェイ協会を設立し、現在同会顧問。主な著書に『ヘミングウェイと猫と女たち』(新潮社、1990年)、『ヘミングウェイのバリ・ガイド』(小学館、1998年)、『ヘミングウェイの流儀』(山口淳との共著、日本経済新聞出版社、2010年)、などがあるほか、翻訳も多い。



島村法夫

(しまむら・のりお)

アメリカ文学者、中央大学教授。立教大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了。日本ヘミングウェイ協会会長。主な著書に『ヘミングウェイ——人と文学』(勉誠出版、2005年)、翻訳に『欲望を読む——作者性、セクシュアリティ、そしてヘミングウェイ』(デブラ・モデルモグ著、小笠原亜衣との共訳、松柏社、2003年) などがある。

島村法夫

「作家の仕事は真実を語ることである」とヘミングウェイは述べている。真実こそ読者に真の感動を与えると直感していたのだ。真実を追求し、どう表現すれば読者の琴線に触れる言葉を創造し得るかに腐心した。今年はヘミングウェイ没後五十年になる節目の年である。この記念すべき年に、『ヘミングウェイ大事典』を世に問うのは大きな喜びである。ヘミングウェイの文学が今も輝きを放っているのは、人間性という普遍の領域を鋭く洞察し、万人が共有できる真実の鉅脈を探り当てたからである。

二〇世紀の世界を大きく変えることになった二つの世界大戦とその間のスペイン内戦に身を投じ、戦争の悲惨、運命に翻弄され苦悶する人間の営みに二〇世紀の過酷な現実を見たが、その報道記事でヘミングウェイがいかに平和を希求していたかは余り知られていない。その意味で幾多の記事は、ヘミングウェイ像を捉え直す可能性を秘めている。

多くの傑作を遺し読者の心を魅了して止まない作家ヘミングウェイ。四度の結婚をし、三人の息子の父親になった人間ヘミングウェイ。六〇〇通に及ぼんとする書簡は、文学的言及だけでなく、幅広い交友関係を通して人間ヘミングウェイの素顔も顕わにする。また、さまざまな土地から発信された書簡は四〇〇通近い記事やエッセイと共鳴し、世界を縦横に旅し、取材したジャーナリスト、ヘミングウェイの行動力と豊かな体験に基づく知識と眼差しに読者は魅了されるであろう。本事典では、ヘミングウェイの筆から紡ぎ出されたあらゆる筆海のエッセンスだけでなく、偉大な作家の全貌が多角的に捉えられ、好奇心を刺激して止まない。

激動の二〇世紀を 駆け抜けた ヘミングウェイ

●編者のことば

最新の研究成果を踏まえた 決定版大事典！ 研究者、 大学・公共図書館必備。

寄稿した雑誌記事、手紙
についても細かな調査に
基づいて言及した。

誰がために鐘は鳴る
For Whom the Bell Tolls, 1940

【内容紹介】

「第1部 第六回」 主人公バート・ジョーダンがモンテ・パソス・スベイン語教師であるが、一年の休暇をとって、スペイン内戦の渦中に飛び込み、ファシズムと闘うために、共和政府軍の一員となる。軍の特典を受けて、マドリッドの北西(100キロほど)の地点にあるラ・グアラマ山中に行き、山中に潜りながら陣地の防衛を得て、ダイナイトで橋を爆破することがその任務である。政府軍がファシスト側を空襲し、同時にその幹線道路の橋を爆破することで敵の援軍を阻止し、かつ道路を断つというのが作戦であり、そのためには犠牲者が出なければならない。正確な時刻に爆破を行うことが求められる。ときは一九三七五月の土曜日に始まり、翌週の火曜日に終わるほんの三四日の出来事である。

り、情愛と友情が明かに記される。鉄道の爆破は政府軍の重要な戦術であり、その成功はまさに至上命令としてジョーダンの責務に課せられており、その遂行のためには政府軍側のゲリラ部隊の協力が必要である。不幸なことにそのゲリラ部隊の隊長はバグロはすでに戦死を喫い、身

リアの存在が状況と複雑に交錯する。マリアとジョーダンはまさに出会いと同時に互いに魅了され、激しい恋に落ちる。戦時下であった、共和派の市長であったマリアの父はファシスト軍によって処刑された。マリア自身も道義を肩

られたあげく兵士らに暴行を受ける。ゲリラ部隊に救出されたものの傷はなかなか癒えておらず、精神的な後遺症から立ち直っていない。かたが、戦線から撤退したマリアは、

「第I部 作品編」では全作品を網羅。90篇の詩についても解説を付す。

関連人物、モチーフ、批評用語、衣食住など作家にまつわる200以上の項目について最新の研究成果に基づいて詳述。

ヘミングウェイ大事典 今村楯夫・島村法夫[監修]

B5判上製・カバー装・函入
約1000頁
本体 25,000円+税

お名前	ふりがな ()	ご住所	書店番号印
お電話番号 ()			

勉誠出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20-6 website: <http://bensel.jp>
 Tel: 03-5215-9021 Fax: 03-5215-9025 E-Mail: info@bensel.jp
 ※ご記入いただいた個人情報は、ご注文書籍の発送、お支払い確認などの連絡および、ご希望いただいた方への刊行案内をお送りするために利用し、その目的以外での利用は致しません。

アボット、ジョージ M.
George M. Abbott
1910年10月30日、フィラデルフィア
お手紙がうろうろしています。
(ノール賞) 授賞式でに代
わつてアメリカ大使が授賞した
でた文章を書いてから、お返事
せていただきました。今日の午後
大使館の広報担当者からして、
スウェーデン・ラジオで放送分の
録音をもらいます。

【解説】ノール賞の授賞
式に出席できないため、アメリ
カ大使が代読する文章を書き、ス
ウェーデン・ラジオで録音で出演
することに決めている。

「回顧録」
* ストックホルムのアメリカ大使館の
代読大使
* アボット、ジョージ M. の手紙がうろうろしています。
1910年10月30日、フィラデルフィア
お手紙がうろうろしています。
(ノール賞) 授賞式でに代
わつてアメリカ大使が授賞した
でた文章を書いてから、お返事
せていただきました。今日の午後
大使館の広報担当者からして、
スウェーデン・ラジオで放送分の
録音をもらいます。

ヘミングウェイ、クラレンス・
エドモンズ
Clarence Edmund Hemingway (1871-1928)
ヘミングウェイの父、アンソニー・ヘ
ミングウェイとアン・ヘドモンズ・ヘ
ミングウェイの長男で、一八七一年九月四日に
オハイオ州で生まれる。少年時代から父の
など先住の道徳や動物の剥製とアル
コールの嗜愛を継ぐ。また、狩猟と冒険と
料理を好んだ。オハイオ州で学業後、シカゴ
にあるジュネー医科大学で学位を取り、医師
となる。オハイオ州病院の助産師よりスタ
フとなる。一八九六年、グレース・ホールと結
婚。六人の子、マリーリン、アーネスト・ミ
ラー、アーサー、マデリン、キャロル、
スター・クラレンスをもうける。一八〇八年、
ニューヨーク州で産科を学ぶ。婦科医
となる。オハイオ州の水牛で、はじめて婦
科では、フロリダの土地で、はじめて婦
科とあて、常態金銭について悩んでいた。ク
ラレンスは人格的な体で決して健康で
はなく、一九〇三年からうつ病と戦っている
な神経病に悩まされ続けた。また、時々の
合併症が快癒に至る小児科にも悩まされてい

た。一九一八年十二月、父の死後で自殺した
五十七歳であった。
クラレンスは子グレースと野外の自然の
中に暮らす。釣りや狩猟、剥製の作り方や動物の
料理の仕方を教えた。また、厳格なクリスチヤ
ンであり、子供たちには厳しい道徳を要求し
た。たとえば、子供たちが汚い言葉を使うと
行儀で目を洗ったという。しかし、つとめて反
を家族と共にミガンで過ごしていたクラレン
スは、神経病の発作に悩まされ、次第に悪化し
て不健康になっていった。アーネストが男性性生
き方のモデルとして父親を最も必要としていた
一十一歳のころであった。父クラレンスは、二児
の死と、一八九六年、グレース・ホールと結
婚。六人の子、マリーリン、アーネスト・ミ
ラー、アーサー、マデリン、キャロル、
スター・クラレンスをもうける。一八〇八年、
ニューヨーク州で産科を学ぶ。婦科医
となる。オハイオ州の水牛で、はじめて婦
科では、フロリダの土地で、はじめて婦
科とあて、常態金銭について悩んでいた。ク
ラレンスは人格的な体で決して健康で
はなく、一九〇三年からうつ病と戦っている
な神経病に悩まされ続けた。また、時々の
合併症が快癒に至る小児科にも悩まされてい

「第I部 作品編」では全作品を網羅。90篇の詩についても解説を付す。

関連人物、モチーフ、批評用語、衣食住など作家にまつわる200以上の項目について最新の研究成果に基づいて詳述。